



10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 0

20

JAPAN

邑菴翁嘗曰附合文章奉詔以遺諸消
息也一代風藻雖不可謂平茲所謂親覩
於古書叔藏於他庫皆悉以擧焉

非諳一葉集 前後篇九冊

東都中構此棋卑

一具庵藏梓

序

佻諧者死常色而中裕妙門也
世人妄謂一時戲言綺語也豈
支然耶蓋能致知而達理之常
變氣之順逆固守自得遜心於
太虛則語默作之無有不善故

棄名利而達之靜安可獲焉誠
意而為之身脩家懇舉不外乎
此矣昔從芭蕉啟函風雲從風
靡今雖其流間有諸者泝源者
亦不少也屬者社友集錄翁一
期所嘯以為小冊以便卷懷可

謂復行殊矣傳曰法不自顯弘
之在人湖子甚人乎是為序
文政十亥歲四月

仙波僧正書于蒼葛
林中之谷神齋

俳諧一葉集紀行之部

古掌庵 佛秀
幻窓 湖中
次窓 久藏
校 編

甲子紀行

又稱野
曝紀行

木里行旅立て波姫モセヒ三更月石寺夕入ヒハゲ
ヒの人の被アマツアマトア東享甲子秋八日江上モ破風モ
立ヒ波と風のあまく風をまかす
波さく——波さく風はもあまく風
秋十日を却て江戸モアマトア古以
屏アマリルア海ア山アれやまかね

東方村向不二とてぬりそせき
何う一千里とまけハほくひそめにすみかくも
せとつゝ一竹子堂と莫逆のうりゆくゆくゆく
せん

源川やまはと不二千瀬のけのく
不瀬川のいとくをゆくよ三はくをす、於まのゆくそれけ
佐あらば川のよ瀬よかげてほ季のはとまくにゆくひくあ
そくはまくまくひくと松並けんふねうるの秋の風のこゑ
やちまくらひやまくらひと波よくひ物あかくと風
旅をかく人旅まく秋の風のく
いづるよやは父を惜れくも母を惜れくも父ハ母を惜
むゆくし母ゆくとも母を惜れし母を惜れ天すくと母を惜れ

はくあくせきなけ

大舟川をくわらひと瀬よかくけとハ

秋のよせとくにゆくわん大舟川

千里

よ上の吟

そりあせ本船ハまくよせられ

せよ河よまの内がまくよ尺よ山の船深いよくよじるよす
敵をこれと數里よくよ難むかくの杜牧、早行の愁苦少翁
中山よ五と名むく

すくすくあくもあく身を一葉の船

船紫雲の邊、伊勢よくわくよくよおとくとくすすは
アミとくとく生鰐すすけと帶はれ鰐と一葉とくうきて
すく十八の珠とくわく信と似て豪傑、信と以て聲あし

余傳手りてひどいとおもひよのへは扇の属つたとて
神あそ入らるゆきすまとかやうおけうるま一せ
きほつうけほのうくはれかましアマカマトナセ
峰の松原あそひもとほくわざをがう

三す、内野をもとせ松を抱

ありの方の林ともれりておもいとほくとく

牛ゆふ女功行あくべおうア

女あゆもあゝ差戻すとくま・草さう・女ゆふ名

子岩白きとしのまき翁やうすとくにけり

草のちや桂木はなきに葉す

閑人の草木を抱く

古植子竹田玉もれ石 うふ

長身のけめぬこす帰す小あす苦き事すかおそれ事す
うれし物すかわづかくしてはうづれ警白く脣歛よ
アシヌ命までとのじゆくとみの深えかく見えのか体をほと
きく母の白髮おうえよ海をもすせよおぬ、肩すやす
まくじとまくじとほく

まくじとは消へ歸すほりき秋のあ

大和守り仰こす爲に竹竹の内とまねくぶる紫衣ハ伝せ
お墨う田里あれハラ御とくまうて是と傳む故うるまを寄

絶うやおぞきともくもくサのま

ニ上山高森ちう清く、夜上のねとだくすやくとキモキ
津さあん太さ生とばくとくとくにんがれ林野にん
よも佛縁いれと斧斤の聲をかあふれうそ幸うそ

卷之二

二
三

佐野義之の書

今朝の朝霞は山ほく白雲
ゆきとまう極めて余りとほんのやがてからひたく西
方を伐る東よりき曉の音の響ひよの音こもる
音入る山に入るとそれら人のかげくに竹の音
音がこもる山にあらわ山とよしもとすらす

三
第
九
卷

あ上人のさすりは詔をたぐの院よりかの方二十石をうけ
入らんとせん人のかくよきのくわいゆくわくさく
とうじよきしかなむことのほひへ起つてかくよ

蒙古文

おもむくにあらわすや

大仰天の山林を越え世に活入る事無くあらば此山や
毛利家が御学問の精修伊勢守ち武道の義教成
り秋風の如きの如きの如きの如きの如きの如き

不破

おひがひをうなづくふのま

大頂子源の於木因の都をまよひむ
時時見るゝを多き通ひて松をけれハ

引やきぬ松のくそよ松のとれ

素若布ぬすう

名牡丹はまよせお年

まの松年齋はまわなうまかは演の方を出で

ゆけほのやまく算自らる一寸

鶴肉子猪の松段大子被れ葉地ハシカレテ手引
かくつて、子魂と張り小松の筋と申す。此處とま
て手紙とある。筆走る所の手引生い立つあり。

まのふさくおと錦よやといられ

名護屋子入多の風と御

狂の本多一氏の「市高」似

ま松大子志のうとまく

かくつて

市人よこの風をまく

松人を

まとまくふくらひの河もま

ゆかくのうとく

海音子野のあらわの白

まく

まくまくとおかう枝を拂て松葉をまくに重ね

まく

とひしと山かかと年をうご

詠聲うるる空と解む風の

さくらうめくそめく

まよれや冬をもよ山の

二月春の氣

水ぬやかの候は皆のやど

高き上うそ三井林風の山かき訪

梅林

くえ白きのやかとめくわされ
櫻の本の花うかびぬすとくられ

伏見西岸寺住口より人よき

ゑ衣うけ見えめかの木きよ

大波音をうねうご

山絶えあく匂うねうすれ

山の風

かくさにねのねうむく風うて

山の風うむく松庵庵をうけく

けいしゆくをうむく千鶴さく女

吟行

葉うむくねうむくうむくうくふる

水うむくせ事うむくうむくうくふる

命うむくのゆうけうむく梅うれ

伊豆不極うむくの東門うれとすまの秋うむく街

香うむくゆくうむく松のそつうと尾張不むく詠

卷八

卷之三

は何んかうち高麗寺の大願ある下りお舟のは、先に
送花一束と申すてやうのゆ代を、さすにすひ是より
其角子一束づけ

白け一ノ羽毛く薄けかくく
外

牡丹繁はく多けむ、増む多が叶

甲斐の山中ニミトス

卵肉の本丸、御旗の第一と云ふ所に
えども、いかにもみゆきの如き手

廣雅

はの奥をは廣ひ海の内に子ゆる

松之介や力士云取中納
今

とまけん程支のまへ
月夕と見ゆるてやは人をはるに宿のちひり一人
あやうい候へますかよき事の多くてこのお宿を終
りあづけむとおもふを慰ますとあとも入らるまわ
お敷引あつてま門の算わたりまがくらし
翁おいておぬくひくは侍まあるくとき氣
此下のあとかくまくらむる所をめぐらし門より
舟うちのうり候とおもふ事多きとぞうれどもの
洞窟のうらうらにあひてあらうすのゆ、甲斐本村

やうえにまつまつめあらわのつまむか
と流りハ名門人をかう匂あつて山ハリキ武子ゆると
はもじくくもすすき人のとくのよしむすせふるを
ひきてこひりりたくハシヒヒヒナカトモロコシ
あくびに鼻も詰そばにすさんやお仲ちよ枝子
お入でねのけとくおもづくは居やうのひきうち
申即ちがくや度あみーとおひづは小万萬のほんとひき

こゝにあらわしゆの跡をえりてすむわれゆ
又ゆきせんとくひに利根川のほとりをゆき
ゆくは川とも船のゆく處とすむのゆにくうて武
市とゆくまのゆすすめにゆく風がま入てやすよ
よのゆすすめにゆく風がま入てやすよ
さくはりてゆく風がま入てやすよ
ゆかまくゆふる根をちよたばほあるくへきものゆれ
ゆかまくゆふる根をちよたばほあるくへきものゆれ
人をくそゆ者をくそゆけんをくそゆ
ゆくはりてゆく風のゆく處を和尚れ
ゆくはりてゆく風のゆく處を和尚れ
ゆくはりてゆく風のゆく處を和尚れ

自らへりあつたがひまく、アラハシ、アモキもあれなりぬ
セ女すゝめ、アモキよドリ、アモキ
アハシ、アモキ、アモキ
アハシ、アモキ

和尚

かくにかくの事六へよ有るけり
ちくれなきえんを、さきのまくく
力もや一 柄もあと 柄ありのう
ちくわくすくと うれあくら力尺され
市内 木ねふ、くつ肉欠くらま
力もや一 木の青 梓のうきく
紫は

神秀

代々承の歴

ゆくもや石のほかの昔のま
緑ちやかまじめく森のま

宗波
曾良

田家

かづけ 四面の都や里の秋
夜用うるえ木や山の紅葉れ有
然のまや宿すうらむ月とまう
芋の茎や有る黒葉楚もじ

野

まゆや一色すすみ秋こころと
むの秋をすうひりく叶すうま
森あや一木ハヤドキ山のや
弓は自率と有す

曾良
松青

樹をよそ千石せ友ま
秋をこめくわくわく秋
力不人とじゆふのう舟とんこ

松青
曾良

貞享丁卯仲秋末五

卯辰紀行 又稱芳

野紀行

百種九竇のやう物りがよろけと風流才と云はる
すより、風流才とやすらひてばらやゆかれ狂
匂をぬいてく終乎生涯のまゝうへてあす夜中を
健て放擲さんと残ゆひあめにすへて人手がくふを
不く是非猶豫にあはれ、みだるまめのうへておまく
おとこへとばねぐくも、れどおうてんじあまく
不く更にまかさん事を思ひてはうとうかく年々枝葉を
すね年々一筋子ほれう西行のかみがちう
室船のまゝうね舟の傍よおけう利休う焉うわりう
千葉そすまの一あーううと川野をあけう造化をひ
せー

旅人とまのあうくれん初一ぐれ
また山茎あらとあくしテー
弓体の住長左郎ともあはれ紙を付て女角亭におひそ
算送うきんとあるあ

せうひをれうせうひをとくんのほと
はうひをれうとくに一筋子を付て女角亭におひそ

さくら四友院珠門人おやハ竹とす文章まとまし跡ひ歳も
年齋の料を乞ふて尺半手かの三月の持をゆりむす
一考の力を入す代えゆふ子ゆとすの物すよきはすれ
物心にて解りつゝひそああやまのきを著もひすすれ
武八小ゆとくくあめを讀り説くは青いづき年を
ゆく色を祝り多みを情く外すアマノ高めに人年
を走まうと似るといとゆめうとくまとけれ
ともこそよりはとこまの紀も長ゆる佛の尼の文をす
い情と盡りてまじめに餘はれ件似よひてせ構柏とち
らともすとやまくいきこほら種才の年よ乃まくら
ゆくはりをりもく角屋すうさんこそくねねりが
ゆとも内あまくはれとまともあれくまくえ竹も

景氣の新めのものゝ如ひハ未だあづれも未だと
お風き氣の手て筋山館の亭の昔一き替と日ハ嘆の聲
あり此和の如きも思ひ別て云ふ、おぬをいへばや
久やかに暮れ行つたる故つての情説す。ひとくわん
人の詠すすむうち年尺弱一人きて能きよ

卷之三

萬葉抄雜章云のすすとすとあひづれをくわす
みうらじゆじゆきほそくわくとゆくとゆくとゆく
とゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆく
京やまハまくすそややかのや
みすはふ保アミトヲモサナ杜ふ、忍ヒテキテモ訪

人より先越人を説く。又麻呂も此處に二十五里を走

りて其の後十四里を過る。

余りかと二人舟を取て船の上に

向まづの浦を向の中まづを渡りて海を過て千島の前

までかかる。

おりて河口より北へむかひへり。

佐々木村より徒歩古事記一里をくらむと三の瀬の地
はきみの伊勢川の源流して山をながめるとかくさ
重葉草原ともいふる所の中をくわぐる水路を
て基石と松木を立とすとまことに骨小屋
廟をさむりある南の湯めぐらすとて御所はせう
和とさうりてお廟れどもまことに水路をくわぐる

河口より北へむかひへり。

寧波の御宿度

磨石子と被りてはくとまよ花

通左の人にてもとくれて立たずく休憩する所

萬松の下人をかくとてはくとまよ花

や人の舍

あそびつけたましやまくとまよ花

いのえんかくとてはくとまよ花

森人無り

まよと称す橋子花大の野津川

けちみの浦太田岐阜のすむまの行の東へて音化り八折

なほくす原ひ毛すす野すと後原をむき田里へと
旅れそぞややほきのせまのせうひ
素手すくと本めれとさう水の里すとよもと林はる
坂の石すとおとお鶴おとすとすとる者ぬ
かちうらへ林つとき坂と音とくのま
とねうすの竹すとけれどり歌と季の物のれ
万さとや翁の歌すとほと酒飲むとえふ翁と
たれ

二タイトウヤハキアリ花の事

幼年

まこととゆるゆるよせ山うれ

枯葉やゆゆかみ一ニ寸

はるか木の波音としや音奈上人の田泣うと護峰山新大
佛寺とやうらとくとよ岸のかじとあうて伽藍の被れ
そ壁を砌一材をハ致て向御とあのかく丈六とく像
若のみとくとくはれとみくとくの御難とをうかれとくと
う上人の御難ハじまと全くおとすと竹とく代の古
あうとふやれく城とわうはうと石の壁と基盤子
の壁外とひき緒の上と壁く双林の枯葉と竹とさの竹
ううわらわらとれ

文と手筋をす 石の上

か主婢吟とのたまし
さくらの事やひかず植えれ

伊勢山田

伊は本の花も
種々八九種を
植へ

若狭山
はやしの山へもよめんわ

京兆集

物の事はまことに
猶代民の事す
今

梅の木子が紙や。木や梅の子

牛 拉 一 門 事 事 事

此のうちも一枚一本で、

うきはれはな
せのくわ樹

おまかせだ。まことに
御垣やお方の御心に
御縁を結んで

三月廿二日
晴
天氣晴朗，風和日暖，萬物復生，春意盎然。

東坡先生集

トテモく 横尺をもとす 木室
オカシイ 事とぞ思ふ 木室 万萬丸
於の具を身にまといと物あれど ひ於へよし
トヨの料子と成るひの合羽やの物次第を純業が直可能
物をそぞうろきゆひこれハ、腰より下へ力あり、此の詔
書は此の手で、此の手をも絶たれど、其の後
手附て やうて ころや あつまつま

そく済

もの衣や 畏人 ゆり 事のゆき
こと新々く 信とぞ思ふ 事のゆき 万萬丸

葛塚山

於久ノ事 事とぞ思ふ 作の事

主指 お武峰 獅子 お武峰トヨシ
や一村ノ事 ちうすやす ふりすけられ

龍門

龍門の事や 上戸 おち産す きん
風の事 かくとん うつ 風の事

西向

わろして うつむらひの 風の事

情冷 亂 布扇の扇、布扇の事 二十五丁山の事 くあ
布引ひ 清けの不幾因の門上 うつ 、大和葉面流勝尾
まくらひの事 くあ

様

さう ねまき 事 おこに 五里六里

うそ花子をうかひやあくまう

扇子風をうけやあくら

苔信水

まつりの木に手洗ひあくら
すがのむすみ三りのまづきのほきみけまつるわうひ
まつりの月のまづきあかせかとひふせまつりの
旅政の旅のうそとこ西の村おなつかさむれ
えれなとおあかでたまめあらんとせうかくくわう
はとすまういはははははははははははははははははは

すせ

父母せききにまつりの春

あゆみのまづきのまづきの春

和光

りまつりのまづきの春

紀三才

先へやされてあらうとまづきのまづきのまづきの
かくはしきあらうとまづきのまづきのまづきのまづきの
まづきのまづきのまづきのまづきのまづきのまづきのまづきの
人へやされてあらうとまづきのまづきのまづきのまづきの
まづきのまづきのまづきのまづきのまづきのまづきのまづきの
まづきのまづきのまづきのまづきのまづきのまづきのまづきの
まづきのまづきのまづきのまづきのまづきのまづきのまづきの
まづきのまづきのまづきのまづきのまづきのまづきのまづきの
まづきのまづきのまづきのまづきのまづきのまづきのまづきの

風情の人にうらやましく思ひ
古めの かくめのとみにねりの人にまつわる風
風情をあひはまよすのうちの尺却く
おもむきに持ひ出せどもとえどもや
人手とかへておまき又これがおひどい

更衣

降仁より
水経
河志
大和
船中七十餘度の難をもてぬる
お提寺船と和尚本邦のみ
脚注の有る所
は同の才は専ら次入て既不拂眼育さざまか
その榮へては因のものかくぬくにや

あわの角すり一
かくわくま
大坂すゆ人の許

洪广

月はやくかとて
月はやくかとて
月はやくかとて
月はやくかとて
月はやくかとて

御用中止の事も猶御用事よりおのづか
る事多有り山ハやうえにそよがりてせうす風もうつき
あわきてゆの事より是のみをえりて上ゆてわが一とき

まよゆきやみあづは漁人の行らるよけゆゑのれ
えりこゑこゑ

あすのまゝにや
りのま

はアのあすを見えや
対うきえゆくアや
ひうり
はアちやうきぬ角きく木ふる

卷之三

更科紀行

相と立ちぬきあわざてうめすかせがのをゆの坊が情のむ
うくわ思ひたまやねね量一赤毛の腰へこまつまくわ
あくめうらもせりふのそよ、數を實一ゆの、ゆやくと
思ひてゆる所が、ゆうそゆけめたけ」とおうめは
ちわうとおもひてゆるかまくは、月がめ壁の破れ
本宮からかづき入る、引枝のうちあめやくやくくつや
けもやくじゆき、秋のくわらわくわくわく、いとや月の
やうに酒かまくんとく、ひそおかるよつや、一めくわ
大きうべくわづか、おれの前強を、うとうおのん、
風情が、くわくわくわく、うとくわくわくわく、
清流玉尾の心地をうくわくわくわくわくわくわく

うむ中は、おもてまへる。 二月

かりけ やひのうちも むちうつ
お方され 桜、月と ふくうだ
姥野山ハ八情トミ黒ト一里ト南西面有テ枝それ
すまかくすくわゆふれかと きるがれと
只ゆえぬ山のすみかとなくあくと
てうきよれんとろすめ きく白くまのむくの人に
於くと見ふる御もとまひうれ
仲 や 姥 いと 月 ゆ 友
ひととひとと文科の歌うま
更科や三のまの白尺やよれ
ひまうとれあけやまくす

おやぢみく大根かし秋の風
木ちづ緑うき草の人れち度うま
風じきりおうけそそハ木ちの秋

善え寺

内影和西門白宗ト只ひとひ
吹風すそそはるせ風ふされ

たくわうそ

月を百代の過客アヘゆがふ事と又旅人舟の上す
生涯とくらひのよとへて老とあふすものハタシ旅アミ
旅とすとすと古人とおほく旅す形をうりよもつがの
幸うつむ行やの風すたうつれそ漂泊の心やどく旅宿す
まくまく七年の秋江上此破屋の古事とくらむに御事
とそれもまくまくのやうきの門の算うへてころる神社
あひづやておとくのとそ組物のまのわすりひてまの
まほげとす役引の壁れと使て三室の旅宿とくま三里を共
風うぶ聲うづに

子の戸と候多う代アひまのあ

而ハ久を度の様アリ豆やもひと申せらるめのやうに
ト一ヶ月ハもがくに來くとおれのつて不二のよかす
ううタゞ上野宿中の船の梢ヤシのつてのをも一もう
さきかあづハ育ちしははり舟子けりとさるまゆのと
えまう舟をみればあを三千里のやい猶キモリテ約ひら
きに能ふの候を

ゆくもやうゆく魚北風をあふ

これと矢をけぐめとくゆくを於す人ハキ
申すあくひてなけの足ゆきやくとくとくあく
トえねでくもや美羽長毛あり脚只かくわくおもひ
立了是も白髮のうみをまめくと耳つゝれて以
まく風すくぬさういりまくゆくとくとくとくとくと
まくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
うれる物先共一むらみすふにくわくはくと武子一石を
よよの切きゆこくとくとくとくとくとくとくとくと
あくとハナツクササギのくへて波吹のがひくあくアラマレ
きれ

豆の八島ア猪子自行曾參り日比神ハまんざくや昨の承
トアてて出士一社に奉ア室ア入々般よち、ひのみあつて大々
出見のみとまれずアトモ室ガハ高アレスラアトモトヨ
アトアトウトヒ謂じおのひとち無と夢をア羅記のむ
考キ傳アトモトウ

サリタ木山の松葉を抱き仰のむりすすき名を佛玉也
立あててすとく人うへや竹すまー舟の舟の枕を

おあくび休てまつらひまほり併の胃毒をもとふ
竜門を食はれてもよのい人そむきよりかよやくのあす
きよひそよひよひよひよひよひよひよひよひよ
まわう割殺木納めにそらうもくひまくの清掃もす
之下

わくかむはゆうすく消ゆすはくはいと二葉山セ
おゆみ大ひりて甚彦のすりえとゆくもあら未未をさう
まづや今けゆきまう一矢うやまよく思はハ莫モ引かれ西氏
安徳の極むやくにゆくもくとさへゆふぬ
ゆくもよもよくもゆきのせまくはりえく

前於乞是故山子之久也之

卷之六

角良へ行合もす。あひ印とどく毛筆のり筆と折もあひて
手の新水の事とひまくせんひね四ふにまかうひ人よきん
とく沙怪ひ且ハ累旅り難をゆくと旅立候難を削
手ち雨ニキドモテノ五をゆくと今之宗怪とす仍て是故
山のり行えぬるニ字力行くとす。

二十餘丁山のやうな山はあつて、石垣の頂上より飛沫
岩の碧潭を育み、黒窟を抱き、人をひきこむ入る所のあつたとし
れへまづみの瀧とやうすいし。

お次のもとよりまかせまへり
ハ是より越後に
もとゆきすとく一村を尽しつゝ向ふ
るる處丈のあらわとがくゆれハ又恐やもゆゑて

時向ひはあらまわるの事あけよとれハセヌヒシムニ
すう情一ノ内トモアリテシムニカニヤホドヒテ取
扱ふとれマリハシキ人をかたてんじて
竹射ハサムトモカニヤホドヒテシムニカニ
ラヒムヤウのふうすの法モヒテヒテヒテヒテヒテ
カミカミヒトミアレルノヤナリシキレハ

うきみとハキアフマニシのちあく

冒段

や、と人里ニシレハ内ヒヒモ難高キテシムニ
黒羽の替代済切寺向ノ方ニシテヒコトシヒテシテ
せほひりやうじつセシキモ桃源外ミリ御メテヒテ
訪ひうとうは家モはひて新屋の方モヤウシレ
河もさに一々都かう道モ一々大直物の法モ一尺一
メ次モキニシテシケモ玉座の方ナ吉賛モヒテシレハ
物古ナシヨ市扇的モ附一対ガヒテ新屋モ御正ハ
ま人モちういヒモハ非社モ付ヒキナキハ幾無殊モ
ハサヒヒラシタリハ桃源考ニ論

仲説考跡モ三脚アリシナカニ行者坐モあ

ミシナセテ旅モキシモテキシモ

當家モ君すれどくに仰ひを萬山居の私

五丁子トモヒテシテ

もよよとくや一向ナリナリサハ

とねの景一ノ内トモアリテシムニカニヤホドヒテ取
扱ふとれマリハシキ人をかたてんじて
モクモク人を駆くきの足モオサムバアおわヒカガの井戸に

至る山にれくゆるけきしもし言をもととお放くろく若者
さうアラク外力オカタヒおまつす十景たゞお橋ミ渡ミ山間ハ
さうかの竹をそりくの風よやかなの山ようちの流れ、石上は
小鹿岩窟ト跡ひけらめほゆみ死算ナヒヤハシの石室を

尺五寸

本家より庵を移すにいふ本主
とえのくぬ一句を植手跡、竹しらね、殿生石すゆく
替代すくすく、西ノ口付のきのこ經典をもととし
やまきの木を定むすびよづれ

砂と植うてひじよもけよほへざれ

殿生石を温泉カサシムリテ、石の毒草、下とむらの
唐松のたぐひまゆのまむた、風に吹かれて、秋生又唐
多あうて、木板ハ芦竹の里、河と湖の畔、砂子は雪、大助
す戸教某の河原人、さくや外とまくして、このすみゆゑ、まを
りくせば、やまとまく、とくとくは柳のうねうね、白ら
すけづれ

向一ね植すとらすと、植、うす

心許さず、氣がさず、やにまつ川の岸、からうて松の木
まうぬひとせしむと、とまうぬひと、と、と、と、と、と、と、
寧、三園の、一、二、三、風波の、人、々、と、と、と、と、と、と、と、と、
絆、ま、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、
景、の、花、せ、吹、そ、ひ、て、か、く、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、
衣、装、そ、す、く、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、
う、の、ち、と、か、く、と、と、算、の、そ、れ、え、と、れ、

曾良

はねすくちる。是珠あすとまのたすく下野の代をさうひ
く山は、かげほもむかとゆきりふはを墨て初絵
うけます。川の舟と等船ともその絵者で四半とみめ
えをうけの算ひうらへば和やの長生の者一とめ
はくれ且ハ風空と魂うむれ様望鏡を引てまく

一ノ用ひめうさき

風はれけりやたく。因極焉

そらよこひきすまとかれハ紹方平とつりこ一をす
めぬかのからくとべキ栗の木ノリモたのうをとひよ
ほめ。株拾ふをじとかやどすむねむらきてわすせ付
竹の音詞

栗とくすは西の本とまつて西方海去るにうか
行基巻序の一生林と松と木の本と用ひますや
まんれだけぬ花や柳り栗

栗とおとむ玉里そぞろ精波の高とあるかくあさふ
うきとくわうはゆうはゆうはゆうはゆうはゆう
やればうつねのりと花とあらうと人にはやのせ
とく文とくとくとくとくとくとくとくとくとく
わくまくわくまくわくまくわくまくわくまくわく
ゆくまくゆくまくゆくまくゆくまくゆくまくゆく
栗の木と一尺一箱高さやとみの上す竹と木は木の
栗の木の木と木と木と木と木と木と木と木と木と
人の木と木と木と木と木と木と木と木と木と木と

はお首をハ原の面から下すとまことにやまとや
お前へもよしやおうと申すや

月の橋のまへをこゝへ渡り上りて宿すもの佐藤彦四郎、
田舎ハ左の山際一里半そぞろにあつて故ゆき里鮒野と申す
もつれしゆくたひとまうるおの門の見度日向田舎し
禁より大より近いと人のよゆるすまことと渡り着く又
かくもよすかち二家の石碑を残す中で二人の跡ります
し先づくらあす安田村もかひくべき名の寺と號はば
まくと渡をぬり、雪峰院の石碑もきよろくい
まく入る事とおはなし義経の刀并豪毛筆と
り付物とす

以及も左刀を左角にかまれば

右刀を右角にかまれば残闇

五月卯の日、其夜飯後おほて温泉の湯に入り宿を
かくすおまよむらを出でゆるやうに寶箱と灯もあさと
いろいの火、けなじめを抜けておずむけ入る雷門而
まきうの御神跡と上りゆきを放さざるをあつて
お病の者とおもて清々とおんみうむすと聞かれ
又旅主ぬるおの御波せうとおれども幸運の御うかる
うちあるいあるとうとく御、高ひねおわらとくと影
おをちおり仰於おまよの觀念を薄れん是をの命
とす力ひとくわが身を、御様と歸り伊豆の大本戸を辛
酸根白石の株とお堂を御の御入へ居申る官方の御門に
つるほとあるへと今まくハシカツテとおもむかすと
降の里とみのあま鳥をもとを祖神の社がとだすとき

年中あつたとおもひてゐたが、さういふことはなかつた。それで
竹林がまだあるといふのである。それで、そのまゝ、
竹林があるといふ。

三一ノアハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

岩原すや。

代限のねすこすこあ見えりぬ。それ根は太隣は二本立わ
れても、のぼる。山は、一木立ても、のぼらん。因はばやひ
のほ鳥も、のうかく、うり。人出本と伐て、名取川の橋
桟をさげたる。それ、のぼる。それ、のぼる。やねは、出でて、ひ渡る。
後うし代、うし代、伐成ハ植継也。せうと、すうと、今持る葉
せうと、うし代、ひさめし度。松井が、まことに、さん侍よし

タケシタセ松本をアセ通じて、うへて、岸向くよ

タケシタセ松本をアセ通じて、うへて、岸向くよ

櫻 よ ねそニ木モ三月 我

岩原川を渡て、仙基寺に入りやせんよくとも、旅宿とすむもの
四疋は連なるすうに、画工がまつて、ゆふすのり、ゆく心ゆきの
と、坐て、如人のみゆはすの事は、まづめの、ぬちあざと考定され
ば、ひとえ東園寺を跡跡の秋生けアリひと秋のけさせおもひ
やうやう、おの枝葉は、一木立ても、ひびく。うるこ、うるこ、う
るこ、林に入て、木を木の下とさへすわぐ。とかく、かく、ゆく。れ、木
そらをうかひみゆとひとよと。それ、まづ、重二郎の木。や、うれ
よきうみゆをうかひみゆ。おなじく、おなじく、おなじく、おなじく、
且耕の邊、放付する。まつだ。是がすすんで、ア風情のまづだの、まづ
玉て、せすらと、ゆく。

わやくとよ是す。然どんもひらの統

かの画圖をすましとてあくとゆけはれくのじうその山陰二十石の
苦竹と手と手と十石の苦竹と酒と酒と酒と酒と酒と

五解

市内村の管轄

はるの不すみへすとたゞの様三尺くろき者も寄て、文字が
すうかく四維圍界の數里を記す。城神龜元年 指察使
ち府將軍大野邦吉東人之所置や太平寧享六年冬議
東海在山節度使祐す府將軍直美翁朝猶所送せ
二月一月とて解武室とお拂拭す。昔よりのみあけり
駿伏かくかく傳ふとどとも山崩れ門前でそくさす
而も隠て去すがそれ本もあてわづ本こゝそれへはづく代度
一とせゆつてかねぬすのくとてにとて御いもふす案

火がみ今眼前の古人のひを定す。行脚の一袖布命の怪ひ
羣族の旁をよきれて、ゆくとす

それもや向の玉川の筋をあぬまねじもすとほり
未ねくよむねのうしなれをすよしゆのとなく一枚をつめ
かくせふとゆく、行の玉川の筋をゆきとすよしゆのう
筋を入るの筋をあぬまねのうすよしゆのうすよ
すよしゆのうすよしゆのうすよしゆのうすよしゆのう
すよしゆのうすよしゆのうすよしゆのうすよしゆのう
すよしゆのうすよしゆのうすよしゆのうすよしゆのう
すよしゆのうすよしゆのうすよしゆのうすよしゆのう
風とよかさうのうすよしゆのうすよしゆのうすよ

諸ふぢ再無ぞれど古ねかく彩様きしひやま石の
昭れ久シテきく御名づけの御上記をうやうう御下記のま
薙去のまつひよし御靈内へとすまつあ一かくまつまの心
候あれどいと子を絶祚ありとすがむらうかおのドリあ
而テ久は三季か原三郎等を遣て、三百余本の仲今田の
あすううじとそらうせんじかかハ勇義忠孝の士をう
候居えりて、かくして、かくして、かくして、かくして、
候義をちつとももあざれうと、かくして、かくして、
子をうち、舟をかうて、船をうる其下二里餘程
あま狭うつ

すもして、かくして、かくして、かくして、かくして、
回をあゆみ、御走東南うちあそ入て江の中三里浦に渡
きゆくぬきとしの島を下りて、船の上の火をとゆひさへ伏し
せまはうと、ふやハニキヤがまかうとまうとまうと
それなりに、下りて、船をとめ、火をとめ、松
のみくらぎや、松葉の匂、松葉の匂、松葉の匂、松葉の匂
とまうとまうとまうとまうとまうとまうとまうとまうとま
あへて神のかうへ大山すよのなまく、まなわせ化け天工
つうきの人うなまく、まなみの舟を、雪居宿ゆめお宝れ
船を、船を、船を、船を、船を、船を、船を、船を、船を、
船を、船を、船を、船を、船を、船を、船を、船を、船を、
船を、船を、船を、船を、船を、船を、船を、船を、船を、

寺宇内に布をさへむとおきハ金をひくやニ附と仰て
せやハ松の下すアラモトノヤマニサヤシルモツヤヒキシテ
松島や朝子アモトアモトうれほとされし 脣良
アハタキ可く賤さんとアリシムシテ御院をまうす
村主が事松島の皆わう京奥通ねうらう石の和氣とお
こうう氣をあそこよひの段とす且松島湯子を教りま
十日湯宿寺ニ宿當す三十二寺のむ一吉原の平田印紫
一ノ入店物外のはあくまきのうちや居候所のは代
信さた墨蓑ゆへトモトモトモトモトモトモトモトモト
お成程の大伽藍とあらまことかの不佛解の寺もつらくや
ときどり

ナニ平和泉とうてんさーあおみれ旅もゆの橋たゞと
使く人詔されし銀鬼萬葉のゆきをそよよよよよ
詔すをよいたづて石の丸と多みかとにひりこよひが
とくとくたゞかづくる金花山海上す尺五丈一百の四
船入はすはいひ人あせをゆくゆくかべの船くら
つけくら思ひうけひ行ふもあがれどかくらと
すれえ年高とす人の船すう一木かか二枚を仰
めれハ又きぬそよひり神のこゝ尾ふらの教ます、豈
至れどもさくらんとぞうがす尾をひそひそひそひそ
ほりをかく戸伊アトミヤアトミヤアトミヤアト
二十餘里ほどと是の

三代の京都一睡のゆきア大门の前ハ里立あつりま
御う詔ハ因野ニ本ニき難山のなからもあく先ず館ニ

のあれハ山上川あがもあらへ大らし右川ハわき水珠をめく
てすすびのつゝと大河をも入原御かゝ四角八石の岸を隔て
南朝りとさへとえ夷を防ぐとて、アシカニシテ義守す
まことは城主義守功名一時の手わざとて國被れく山河に
珠音うて單車もくろむとておおてせみのうじよをも
首一付す

えふや付くものとて、うちの内と

うのあり通ひ方との白毛うれ

日曾良

かねて耳奪へて二寺を破帳す經あそび三持の像を納
えきうち三代の松を納め三寺の佛を安置す七言玉歌と
て殊の處風子破れ寺の柱あれもす朽て既に新廢寺在
の最とれくある四面竹の門からみだ蔓草を也後づゆる
すの事はまほのせんとあが

さみしみは津跡一てや先墨

あがをくくよんやくも岩の黒手ぬこ小足等の小島
をもくあるこのゆく風あの大山のうへて出羽ふりうへん
とすは松人あれあすきなれハ寛ぎやくもくして脚
筋一と寛をとく大山のうへて改ふ手けとハ射人のま
さくすけとくとくもむる風ぬりかくす手筋の風

足きみすは風す。松もと

ゆくのあれすく出羽ふり大山の湯へきまくはなされハ
そあくの人をたのむとくとくとくとくとくとくとくと
あみく付れハ寛意のまの及船着と模てく松の枝を撫て
余へ先をとけよとくお危やめくとてあくとくとくとく

かくの事は御所の御内侍の御事なりとて
す山森にてまことに御本の御事なりとて
くらべてお宿ははらす御事とて御事の事とて
そぞう岩手鐵之助がて御事とて御事の事とて
かの事也かとて御事の事とて御事の事とて
送りかみにまつせしと見てとて御事の事とて
之猶とて御事の事

尾花ははるははるの事とて御事とて御事の事とて
おおへりとて御事とて御事の事とて御事の事とて
おれへりとて御事とて御事の事とて御事の事とて
第一とて御事とて御事の事とて御事の事とて
おひもよかひにじにれひおひの事

酒持を伊リマシ持り 花

曾良

山形領に立石ちよちよとて御事大いの御事とて御事
はは開め代あつ一尺ナマダア人こひすもつて御事とて御事
トトモテトトモテキ百七里とて御事とて御事とて御事の物と
おうと置て山の御事とて御事とて御事とて御事とて御事
相手すとお石あく苔滑と岩の院と處とて御事とて御事
御事とて御事とて御事とて御事とて御事とて御事とて御事

とて御事とて御事とて御事とて御事とて御事

きりうや岩下寺入様の事

大河を越えて大石田とて御事とて御事とて御事
御事とて御事とて御事とて御事とて御事とて御事

卷五

萬葉角一かの御事はまくせんとおもひ
うすくわざとてまくもとおもひくまく
あやしもあめくまくの風あらまく
わくわくはあらまくまくの風あらまく
あきらめむおもむき一き難いわが故めに
軍で酒田の海に入り方山の後ひ哉のゆく舟を
うかうか船つゝみゆきじゆくゆくの流スル
葉のひづれをかくせんとおもひくまく

卷之三

六力の御意に蒙る國に吉と申すものもあらずお當
代金は是の閑梨子の御事の御心よりて悚懼せ

情をうかがふ
ゆきのうへ
ゆきのうへ

うやまくうすに南答

五日櫻次平治山開闢除大岐ハソれの代は人下さ
を以て受持式の附沙里山の神社と號す事宿黒の字を
里山とあやうや附め黒山と中附と附黒山と云ふや
生附と云ふと毛羽と丹羽の眞子と竹と風子代子と
竹と中附の月と御属と今をく三山と御寺武江東
駁々と屬と天台止觀の月と御子と高利融通の法の竹
うけ子と御附拂と御詠行法と云ふけまし
室山男郎の駁勅人貴の且忍と御禁長と云ふり
仰て謂ひ下

八月の夜の山中を出立て引け京都宿へ降りてみ
強力とまのよきひれとあきらめゆのゆに水あこで歸て
やまと八里更す八月行道のや冥に入りてひやくされ
自殺あらえく頂上に残れはるほく月夜のうす夜を安
落とし極めて仰つてひづく待つもすかく背れがゆあら
翁のかくうに詠片小解とさうくはる波濤雲水をうぐ
てうに腰荷て劍をうつ抜く月夜と船をきくて
きく音をうるかの龍昂子劍を海とくや千鶴莫耶北
きく音をうるかの龍昂子劍を海とくや千鶴莫耶北
うけまきす体とて三尺とくわく様のけわくすまん
ひづくはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる
元のうるはるはる炎天の極みをうつせざりて行子信

山中の國西行者は式とて化すとて木と林すす仍て
名をもとめずむかく

かく角れハ西行翠り露を拂ふニ山附れの匂い經冊うす

岸 やいのニタカヒ田尾山

やの峰 いのくられて月の山

かくくわぬ酒呑すめす般うれ

ゆゑ山 遊ふもそはふらむよ

曾良

明月をもとて野あけ城に長山や重行よすよおたか
むくくとて他所一をよなすと仰るはる川舟をまよ
酒田のみまよしき御庵不取くち醫師の説をかね

ひいもんや吹寄うけてみすみ

毛とよきを海に入りてみ川

三十七

は山水際の風光を盡してお宿の方すとさぬ海の
傍より東の方山をうへ砂を停ひて山を踏むと陰十
里の氣度がては波風さかやく上雨繰続と一
き海の山かゝる間す莫他と向て又すれども、而
此の時をまことにとひの心を胸に入と雨の時
をかうすおたづねるがゆうすかくせんに
舟泊り舟をとふ先駆因縁の舟をとて三重並居
の船と計ひむすはるは舟をねうれり船の上にとて設
き檻のえ木ぬりはめの代舎を残すに上り降陸す
神功皇后の御事とちまくす千満珠もとせせと行幸
の御事とすいわすいわすいわすいわすいわすい
是處と花ハ風景一眼の中す南なる海をさへ其
かげうつてほりりぬかむやしの穿波とがくと東北
を寧く秋の草木をぐるぐる海かくして浪す入
事もいとくにの張模一里ほり併ねぬりかくひ
又とぬりね一ノハタカ下く奈波もくもくとさへ
さへゆひとくとく地を覗きあわすと仰
ききつてやあすぬれの御事
ゆくやおれりぬれと御すと

多記

多記や神門の御事と曾良

やドの御事と戸板をあくとぞみ位耳

若上り眼力のよきとぞ

は、うへぬむちうてあらまみをこねる
酒のうちありとてかまねて小陸をよやうすいもれにての思ひ
猶といふやうに一矢々てかがまよの育まし百二十里。山の口風の屏
をくわきハ故にの次子の角を打つて人ふれ林中を一歩
は算す。計りばれよ。是の間の北方より出でてもあらま。病者を
すそにさす

又自やうりと考のね年ハ似て
竹山海や休渡子 桂川又天向

久六紀の事は大もろい約之小山一の
事もさへつれ彷彿引よどて有りて一石落
而の方もと見ゆる女のか二人ともかの

一あす逃女とおもひの君と 月

宵良とがれはまめ竹の木四十八ヶ浦とやあ
ぬ川をこもるて船古とみ浦子も檜尾の友浪八春あらん
し初秋の音よつがきのそと人うまれはこれも五里
伏つててもうみの山彦入のびのやうかすうりれ
せきか一舟の舟うすのゆうといひわざれかが玉入

えどりきやうけ入たれとぞ銀海

外のあらうかう若くしてこまほ八七月中の年もじに
大坂うかふ高人向かうまのゆうされ松扇を作り
一年のまのへはそとすけ若のゆのしめとすき和食作
一にせ重の冬早世タマシとく其見追善と傳す

嫁も勤け余はくハゆふのつき

秋すましもくじにもうややふ荔

色中全

秋すましもくじにもうややふ荔

小ねくさむとも

秋すましもくじにもうややふ荔

秋すましもくじにもうややふ荔

やかまの神社を清寧寺の甲路のまわりは秀源やう
属き一村義翁とまじにかくさりてやけま半あるもの
不思議の同底ちやうへかく菊かく手のほりものまくら
てくえ高陽寺跡秋おとし空寺の跡本名義仲義狀
不思議の神社と見えつけず植り次郎と使と一すきもま
のあらう跡記す

むさんやれかよのうめまくへ
山中の温泉ゆゆくは、きりぬけに不外でゆゆかたの
山陽を覗うるやうに山は空三十三所の附れをまとめて
お大慈大悲の像を安置するといひて取名す。名前をす。和歌
谷組の度々、そぞら侍へゆき、すくなくして古松樹を下
草木をさうの小寺岩の上平生す。うけく保体のあだし

石山 オ石 まもきわらー 秋の月

温泉を浴すせゆるをうつ次

山中や山中よをくぬ湯のまわひ

アリとすのハ久末三助としゆまとかれ、父代祐とあ
みゆの貞吉とおまのむ。これあつては風流とぞうす
らうとくぬ湯とく貞吉の門人と奉ふきまつる功名のね以
一村お宿の料を清まつて文むかへてとく事ぬ
曾良八役を病て休まず長年もむかひゆれへ生まひ
ゆきくこそもされ候ども最ゆくとく 曾良
とく草うりの少ひ候まづうみ雙毛すとくて
ゆきすとくとくて

アリやキ付けさん 望のや

大聖うの体が令るきとくちゆるにかぎのせし留いよ
のねはちよとくとくて

脚背 稲田 オヤ お山

とある一筋の筋す里す同一モモ秋風をかう、山室す
川へかぢの、山をくへ渡河すすむやうに経枝写す食事
手入をすれあひては早率す。山室す下つてはうて

傳の残歌をうえ陽のすとわひまつお音を中止
極られ

庵掃るやや寺子うち　松
おひぬまくとす鞋あらき於川床おの鏡吉嶋の入に
舟掉さては越の船と男め

舟すすり船行波をよこせ

舟とよもじりのねのね

は一そと風景画うす一瓣をかすむの只用の指

をよこせ

丸石古刹寺の長老古ふ因りれハもめ又金河の小枝
もの彼和千尺送くはすましましてひまつまくの風景を
さすてゆけりおきゆくわあら化されとあらと既

舟とよもじりのねのね

五才山に入て水平すとれすとえ解ひのゆ寺し邦様玉墨と
廻てかくふみに詠とあへりて貴ふんがとくとや福井を
三里はうれはえ飯走とめてゆくはとみのとどもと
こにち載とむすくほさくつづく手こうはととあうとすと
あぬきとすくほすくほすくほすくほすくほすくほすく
やと人ふわばれ筆と存命とそととととととととととと
そとととととととととととととととととととととととと
ととととととととととととととととととととととととと
ととととととととととととととととととととととととと
けぬ女をひつてうわうをまゆ切るやう一へほほ
ア行とまゆ方ゆくぬく用ゆくはゆくとまゆかわくま

日清一　赤城のまゝつ砂り上
十五分亭をのむに、行商の時

名力や小ぶりあきらめ
十石の舟を載せられ、まともな舟見ゆるは船を舟を
そぞろに海上七里弱り天正月某日、の破船小竹筒等と
あわやうよきくあめさを構ひまた舟、のちに船頭が船の下に
火もぬけ、まつりかゝりてやかの小家、うし依り、まほ運びちよこな
事あらず飲酒をやうじてのうとおのまへりと進す。惜なり

はめらるハメラル小うしろコウシロウの森ノミの室ムロ

千葉の内にあつて是れをすまむとくもくちを放す終通す
はみかとよしむらうのくみの玉とほし羽子にすけ
れぞ大垣の店入へ曾良と住むすすめがい越人をす
花きくぬれり家を入集つお川子荆口父子をかきつき人
人を取引ひそ隠生の手をもとく且候い日ひに
松の根のまゝの木を上るす長月あまなれハ住ま大江
室ゆゑと又舟うけり

吟叶

かきくすす

まれゆく秋了

佛語一葉集文之部

古學庵佛号
幻窓 湖中 編
坎窓 久滅 挑

稱乞量種

萬葉を表紙にさうえ竹を小方す者、牡丹と紅白の是非
争ひて赤葉にけり。不知其事は、アリハナリ。不知其事は、
花びつづく事もや極と山後子のくに對せ是一葉の成
桂風去る音す。うろこやかみひさん爲林草木とす。其聲
音うつくしくて能とせん。其聲うれしき端とからず。其聲
人呼とす。院の外とす。而友門人呼とす。其聲もう相や
ううちす。かくすれくらべて声とす。人呼とす。

五十七
あらわのり御とひまこととせ度既に被ふんとすれハ
かとくわゆる事はやうておうちさんとこちのむね
いぬよからざれとてよしもみかよこはれふ筆一叶
すまひよま書わるるにすくめびつやきぶ旅
宿のむかひにやうんこかうのをとせの飯は一うでまくぬ
まへてお宿すとまきのま秋をさとふと、ひと度す
宿をそくへて、五角のあひはたからみかのめひのも
さうと走すされば人のちかうとあつとがくじくらば
はほくとえまくす古ふ店とやまと三間の茅屋はまぢ
一松の枝にせまつて御前、井の枝折戸やすらぎ
十石桶つゝまつて、南のむひ代は水樓と呼
代は不二うおと宋門事もすとてあめうすに
三十九の院よりかくと自と人にはとよかくとれハ神自
れのよかとひゆひあとくとくも名肉のまくはりと
て先き並をうすそを禁度、己身もおほすとくわ
度は半吹とれては鳥の度をうすとて、あき扇破れて風
きうけすれど花火とくもあうとて差焼くとくわ
も斧工やうどりかな山牛不材の数本木にて、竹ト
傍塙素ハ毛う木をとて、張模渠ハ新草木とえ
と聞すよらうとて、さとてかくす世をとくとくと
はうけぬひて風雨やああああああ

宋門辨 ねぢふとせの文

さすめ紙かくまくすおもとぞくとくとく五角の筋め

送你六經

本居宣長
日暮の舟人
森川も許さず古より
風情す情の人にハシメテうなぎを賣る者と
いふ者也れどもおまかめといふ者
おのづらひともされんて物
の事もあつてやうやく今は古がむけのあまを劇と

獨りよきみをうけのいはれに捨ておひる
夢のくろべ羽おむすびに風でいふ
此人のあさよとく

松の花のうらむか木乃の旅
しきんせしよもと木乃の隠
ほひあらわ決定すがトモれと藏舟の
かみふねをとせ

送偽尊吟緯

枝葉千葉龍をうけよらすとゆくとゆくとゆくと
まやうづのはゆきをそ武の東源川の手廻をひいて
改り一歩をやへ本とよめは偽尊の風姿をうの市を
西へまし斗轂り御の身とみよと又作勢然勢子
詣んとしあつかかの都とみよとあまかく首とすと
お前のまよ翅をかよとめりすとめりとめりとめりと
中とよきしめりとめりとめりとめりとめりとめりと
うか半附てとめりとめりとめりとめりとめりと
がのとめりとめりとめりとめりとめりとめりとめりと
おのれかくられかよとめりとめりとめりとめりと
よすとめりとめりとめりとめりとめりとめりとめりと
よすとめりとめりとめりとめりとめりとめりとめりと

詠空城

空力のあ無よ我止てと音ニシキテ人間アヘ

既空城

たまひのうかく
一
頃
月
か
く
一
へ
は
ゆ
き
や
す
（
か
く
い
く
く
か
力
く
わ
く

文
鳥賦

一鳥小大乃りて名を至るをす小を鳥鶴といひ大を鷹た
と云ふに及ぶ者を僕一ときやの鷹子とせう成ハ
人をくゆく人をつりねりて翅とからく二足の脚と
尾と成る事のやうと見てましむをさうとすとあもれ
らとむとくわざのゆけりのあくまつたうかあくま
ゆくかんとちがひの才と情りとしの御修とされ
がくらきをあくと食於のキシムシは大し又はうれと
うきよのれをははすて害やく大し能中れの冒たは
性信強勇かく能よ翅とからくと腰とからくと
をかくわくと肉ハ鷹の皮と外くあくべきのうのうの
常對人不取の言と抱てゝかく凶事をひひて移と
もよ里をかへハ萬物の精をりて兩脚を以てて用相
を費へる精を辛苦の苦を一いはや成ハ存のかひこそつ
うみにの世をはる人の内をからすの精をもとづ
て跡をひつけあるよのうをかやまし野のさむとてから
すと傳ふ是これほもよとて大うとせむとせん
さうゆゑかくとゆうてふが食缺するからむとよも
はるかう人をりてを傍ては其氏をかかく情を俗士
も甚くとも其年ぬよくは一の弊と失ふうとて
三日の全鳥の筋をわんと

手廻りにて枯木たゞ一きわし牛乳のみ
あひ妙見う刀をかてう竹をうせと前立主
うの扇くふひまつたれにゆき既に拂へくニ
アレアレ、夜もつゝーーあひゆーー残とかほ
トヒー又がゆくとゆとゆゆゆゆゆゆ
ましとかじゆーーゆゆゆゆゆゆ
キムシセヒツのゆゆゆゆゆゆ
外とあらわのやはひひひひひひひひひひ
うかうかすみすみすみすみすみすみすみ
石ありけりかみまう東坡居士がゆくとや味
翁子供つわわ、昇天かゆくねどひんりゆくと
升あがくすきくとくめくゆくゆくゆく
傳り聲アドワカトの字経の對ゆかうてかうか
に波をうづけとくうづけとくうづけとく
キテふくよもまたに空代りやく

閉闇説

ちむる君のゆもかうて佛も五戒ゆけめよ豆と
シベシカタニ、おゆふく情ゆゆくにゆくれあうひせ
おやうーーくまぬぬうよはの極ゆーーおもひせ
かゆくはーーはーーかのゆくはの極ゆくはくは
あゆくはくはくはくはくはくはくはくはく
あゆくはくはくはくはくはくはくはくはく
まもおゆくはくはくはくはくはくはくはくはく

情と云ふ事はあつてゐまじけぬにて
人生七十をすむ事とて死ぬ事とてもまへ
二十餘年もけたる先代あると一板の事か
年六十をすむがくよくよくゆき
すらうううううううううううううう
五ひまのへんふとおほく
おはなはははははははははは
あわく是非かすくまよしらはせ
ゆゑに食がぬ魔界こうろと
てはりとくじと南毒もはの只利害を破却一も若き
ももれて聞りあはれいこくわせもの一みとくづれ
人あはせ用の筋引をひかへやかか葉とたまくも
うううううううううううううう
禁戒トあま

おもやまえ波ねらす門の姓

卷之三

うそうにまつて、いのちのたまごとつうじやくすの大きくなれ
れども、おのれをまかせ、おのれをまかせ、おのれをまかせ
まかせゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

銀河序

伊勢の紀行跋

かくすの事よりかく實をよみて、たゞ一ふりもあ
めりてかくはくよれども、其角一とこわのがまよ
かひぬき一うち向井氏吉のゆもつやすきをもつて
ほりへ事なかつて、甘きに幸ふがまほくともる

水のほどよし原ふとアツヒで御一掬三百川のあひを
あわせまく下りてのれいゆとみて仕事と道をも
川の秋のよし原の宿のあはせとやまくまくのれとれ
ふくよし原カ月ちやうぐさくとすとあふらす
おこなーとひがーとせんとおこりあらひの角（アシカ）ー、せんと、あつ
えひよみてせん事あふらむとおもひのせんばやせんをす
えふるをき

卷之三

西
北
方
之
風
也

まのアキハラにておもむろにみのま
一匁をひよか友素翁とれどもあくまで
文書はてはあせりやうじゆめひゆのすこえをもたら
まつたるが如きは解説のあくみゆうすくほ
まこと吉井蘿村りりけんの虚言冒頭されまことふ
是人ナリモトはよしわ其母を生ずるより
い南無のひそひそやねく玉むのあくあれ、まこと
めぐとおじがまくは、往々はまくとへん静がられ
物これ自らもとアサ人ナリとてけりとまくわーと
不思議な人をかくはがくかくとて、無くとて、かく
寝てゐてと見ゆる事とやくもとをやくとあまく
言ふ成りゆうて、まくは某翁ゆとよくとゆ
かくふく画くたゞて丹青はーと情ゆわらか
ゆきとあれ、まこと

再びおとづれをもたらせば、せむりあつまひて秋の風によ
くとまつた。やつてもかく聞こえてあすの音をうつしてよ
む。のちにほくめうきりがく

虛臺集跋

翠くよ一葉甘味に
李たゞや酒ともあらずて寂山は御ますこゑよのうき
其句はきくにまき
あとのいわゆる山かとあるて人の
いづれぬ能栗や

志す情^{アラシ}をもつて、ハ西施^{アマミ}をすくねの元、美金^{ミンキン}
が爲^ス上陽人^{アマミヒト}の軍^{カミ}の中^{ミドリ}まく衣櫻^{アマミハタケ}をまくと
下^シのあま^{アマミ}を眉^{アマミ}にさす^{アマミ}。歌^{アマミ}をひの姫^{アマミヒメ}を娶^{アマミ}め^{スル}けふゆ^{アマミ}と
ゆく^{アマミ}。寺^{アマミ}の火^{アマミ}引^{アマミ}あま^{アマミ}あま^{アマミ}の情^{アマミ}を抱^{アマミ}きむ^{アマミ}。松^{アマミ}の木^{アマミ}を向^{アマミ}て、^{アマミ}を
後^{アマミ}手^{アマミ}をやつ^{アマミ}てゆ^{アマミ}心^{アマミ}を松^{アマミ}に付^{アマミ}く^{アマミ}。ゆ^{アマミ}と
其^{アマミ}詰^{アマミ}震^{アマミ}動^{アマミ}かみ^{アマミ}まくら^{アマミ}。京^{アマミ}の鼎^{アマミ}をうそ^{アマミ}と株^{アマミ}て、就^{アマミ}
泉^{アマミ}の文字^{アマミ}を^{アマミ}拂^{アマミ}。毛^{アマミ}化^{アマミ}の鳥^{アマミ}の^{アマミ}ゆ^{アマミ}。ゆ^{アマミ}と
ゆ^{アマミ}ゆ^{アマミ}と待^{アマミ}

閑片錄

地の弱いもの弱いところへ人間が立ちあつてゐる
力の弱いもの弱いところへ友達が立つてゐる
とおもひてゐる

わざりてかまくらかさんえもひそむ、取ておゆくをかねす
さうりてかまくらのぬや
ぬりぬはいとわざりのよみのを

自得巣

ひよふとくひよひよひよひよひよひよひよひよひよ
ひよひよひよひよひよひよひよひよひよひよひよ

行て

あてこよ人のあそびんまう

札箱

間あくせきを付とうきて囁寄次第のまことや——ふふ
間あくせきを書を細めにせしむる方す入たぐとひまわ
書ふくは筆を筆を細めにせしむる方す入たぐとひまわ
づきき一物三用をもむくすと八寸おもて二尺あ御
づききうち二の割を能うてうて薄削光るの良木なる内
うれきりけて一用とさんや又二用とさんや

燕葉不取

え原仲冬毛笔是書

左右紙

人の経をよどむれのれう長を設くふれ

詔曰

ものづかへ廢さす
秋のぬ

孤之鍋

山東生

一
家
重
岱
山
自
笑
梅
萼
山
這
中
飯
顆
山

自笑稱箕山

故公の加宗原もさかうみまくわづれあまつよ候
ゆゑて余ひきつのひをこゑと見そなくみつけて花
入るをやさんとあれハ大モこのうへゆくとあら
つゝて風をめかへまれ、さうしてくわざがいはく人白
筆院のいみとお煙入つては士末翁をきてくわえ
心がくられやうと用ひては士末翁をきてくわえ
き一むせよと紫ハ方すとせよとせよとくわえ
うとあはせらどくわえ
うとあはせらどくわえ
唐向うあらすわのりゆく事あれ李向うかとうて余翁と
きよくさんとあらすわのりゆく事あれ李向うかとうて余翁と
きよくさんとあらすわのりゆく事あれ李向うかとうて余翁と

極
古
文

歸
元
自
註

おまえさうのけまきはなむかう

立派な所へはまづかず人、うそもあらず
雲森人文

寒森人文

甲子初秋七夕雨呈丈人

え船と文有すまの風也や天るまくら白浪記はの音をひ
き一て鳥散と松枝をかき一紫椎を吹わすき
二里を走れどもあまくさくまの音をいふせん。或
かやうと一せんとうりけまくさく打遍野小町、歌を歌
すま人まくさくまくさくニテを掠りて西風のうきう
きなづくとす おまくさく

通歌り

大メドリが木の上に宿す夜 松風

雪竹聲

海の東門が木の上に宿す夜 あらゆる方へうな
うけうはしきを画してかの聲をかひとまわるが
大の木の下すよハ吹きよちうとてにゆく中に
一匹のからくをゆふる星の下へとまわるやあら
きもつてす

ニちうむけゆきゆきの秋の夜

梅折贊

此梅の名はいと名付く上づくはくまゝかひりと
度故事のあわくやかくはづくわの山もかてあらの里毛
姓う姓のかくみあらわわちうハ根根うらしハ花を人と
争ひ是人附す是子をうめくとく人また折
の木へちむるあらかくはくはくに立てくわ
至るといひまゆの木ハ横づらかく

せはらぬむく梅う梅の本う

卒塔婆少阿贊

うれもかくくまくまくまくまくまくまくまく
かくつづくはくはくはくはくはくはくはく
今うにねくまくまくまくまくまくまくまく

かくらみのむかしむかし
かくらみのむかしむかし

たまへ、かわさくすかうまこと

元代後

信陽ふねひの岸からぬけの洞の松葉を吹てキヤウモ
仙きよすきは琴に弓に弓の弓頭と、あくし全鐵比
ひきかがはつとも盛り御うてて日人を一と泣一の人
子やまとつくとお寝覺めのびびりて、毎の意味あ
ふじふそれ大般身金の化者を意せばれて、能樂
されはさもやれて扇開けんを並洞 井海
とまうるい一毛を運べ一叶の嘆美めうと

助行上人贊

すまぐく名はうやうとだまぐく
かのゆうとくまくつうりれ
花のうとくまくつうりれ

桂骨贊

よかのうかとおかのうかうかとおかとおかとおか

東順傳

えんまんのうかとおかのうかうかとおかとおかとおか
枝や。よかのうかとおかのうかとおかとおかとおか
とおかとおかとおかとおかとおかとおかとおかとおか

而へてやうがまひかきうる所はあらまじく神ふれひ跡す
かうじゆめのりとかごみといへ大本妙奥の其をうるゝ事あう
一對馬をままで恒の音にかも何萬の里とく備後
そぞそ釜魚龍鳴の聲たゞかあらまじき音をいふも
て生れむれを破く松を折て葉をすり取すと千手の
けりし市店をふ侍すかこよのいひやぐる身を放ま
れとさくねと十年経て十年のまへい車つこほひら
め上り生れてゑびす御殿へ見る是れ大佐お市の人今

入内めぬハれは西隅うれ

馬糸藻

金革を縛つて起てもゆかたは士の志し又變作
さうとすも思ふりと乍とすね食ふ事は義を骨
やで實と積りも並くもかへひまく風雲
肺肝の下りひそけふ事とらあむと十とせりす
れどもわざととほづくわざと縛つて男側を先覺め
詮をきつてとくとも老母と弟の絆をほりとて
ばかのきはうらうとまんと景辱のアラシとひきくは
かうかへとす仲秋中の二つ油升金はほほの松子
しりて珍りてとく通食工材を度せゆきとくやゆく
手の母子きよからせよの経るおむひとあすゆく
もふる五十年うだりとくとく公のおと後おときうれ

恵まきを急せとつれむ秋風に吹きふれむる夜の枝葉
すゑけくわゆきくわゆきくわゆきくわゆきくわゆきくわゆき
却きも毎のくみはくわゆきくわゆきくわゆきくわゆきくわゆき
かづくじらひを親族のそよぎをもほく
終まきもとくわゆきくわゆきくわゆきくわゆきくわゆきくわゆき
よと毛玉枝葉のわかれことくわゆきくわゆきくわゆきくわゆき
うそ葉枝とあくべを被るも今月のかづくじらひを
くわゆきくわゆきくわゆきくわゆきくわゆきくわゆきくわゆき
じよて父のくみすのくわゆきくわゆきくわゆきくわゆき
りくわゆきくわゆきくわゆきくわゆきくわゆきくわゆき
ひくはくとくわゆきくわゆきくわゆきくわゆきくわゆき
めくはくとくわゆきくわゆきくわゆきくわゆきくわゆき

あくわゆき

秋風すそれてくわくわく葉の枝

十八樓記

みづふふふふ川の邊にみ樓りてあくべと葉の枝
いあくべーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
かくはくのまへねのーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
かくはみとくに序 曝布とくらしてくらへたまく
舟の里のゆうひきく漁村舟をかくくわゆきくわゆき
おのうさくらしてくらはくはくはくはくはくはくはく
くはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
あくわゆきくわゆきくわゆきくわゆきくわゆきくわゆき

まゝれどもかくしてめまいへりておれかうらしかるは速ゆめハのま
えを助ゆむ十の度を准すて一脉のキヨおもひてよしとぞ
橋よもじいとくにかくハ十八橋とてひそむにあし

此より月夕のそれ等

試金記

勸行危記

ふかおとちのうへりて山をまかへよもやま
まつらひをすくすくあへ
林とほむかのむかへて
數千せんと二三百
八幡やまのむかへ

余はもと僕とて、准一のなかよし甚りをかうて、此あがきを
やうじけ利益の處をあがへておもひ又あがてしまはる
人の道をうながれば、まことにあがめられかへふにすみ
於て、准一の戸門、通称准一門をかくして、准一門を
孤狸子とぞえらるり住居よりゆくの宿場あり。よし
勇士若狭毛無四聚する伯父、あん竹、一と今ハ八代
も、うなあいやうすうのほえんわきのみあたるゝ事ある
市中、とぞ十とぞはうす可と云す事すら、かある
みの出のもの、とぞあひ鳴牛あらざるれて、奥羽春深
は夷をさす而と年一ち御まぬゆきかのゆう様子
蹠を破りて、下りゆきのぼりに、舟の浮葉をあられ、
ゆくと、蓋のうけよるゝ、折湯かくわくとぞうて
ねびきゆくとぞ、卯力のけらひてうかう入へ、准一やうじ
とぞくおりのうみあさすくも、お名跡とぞうて、准一
又准一山友松子うとうて、却てあらざるじとあらざる
も、うそくらむと木筋のてくらむとくらむとくらむと
無一とぞ、ひ異楚东南とけ、とぞあは、唐海洞をす
かり、六本申とぞ、あら人あらとぞ、とぞ、ア南意略
うちおろ、かゆゆと漫て、床、う枝の山せひのすねう
かうかのねえかうみくんで、体を擣り、ぬるや、舟を
笠取行かくと木造の舟、替のやつ、あは、引渡すと、是
うかえやせのゆふと、新がくくや、美家物とて、是
すとひて、かくと、二上山、ひさゆの件、かうひても、
時、のちまことに、わざひやれゆよじ、古人といがまき

玄の扇手今とさへてかくは風あふ身をためかう
手携き勞りてまぐらすはぬめくらむかひハ聲
其能事オリテは一すらよつたる樂天ハ又織の神とや
かうも村を被り是更入贋のひくとくとくとくう
けすみうきじやおすいにうかぬ

まいかの木梓の木を阿ミ木を

酒首寺記

山を幹可て性をや一あひ水ハ袖已情をなすも野
原ニナラシキナ仕事もえより宿内モ私ノトド
月ナ佳境モ盡リ風經を呑て済うモナリ落葉
ツカケシ酒首寺と云々門ノ戒情をうけてかおの門内
アヘンの御子御子御子御子御子御子御子御子
一喜くともおう且それ等アトニ方丈外の二万体経ニテの
先モつまどもナキナ木モ檀石モアヘカクサム
ミナムアキナモシタスの海が並四面壁と左右の袖のてく
一筋モ抱て三上山ナモアシ御モ詫也かからず御れ、ね
ひき波モアヘアシのひのきをあくダラモテ音頭石
山モ肩のみアヘカクモ長さあり根モ根モカギアヘ後
山モ身と並み時移際溝の間にかくわくアヘカ直の風
かとスミタモアヘカ

西方トナ花火入す竹の

成あう庭よおそほ矣了詞

松竹梅の木の根元に枝をもつて一又能枝上さんとか
さの古紫藤とてやうじ風景をあわすかとひはと起
する事不似葉には枝不似根の筋とて人皆牡丹をあす
る人寄生を以て人て他とはう焉と似て人余病を笑ひ
人不病とて松木相扶へて死をえり松葉のからしきを
嘗ねじらむやむむを四付すをうしてうとせきを
そつて坐た曰おとく鷹音とて風子よ風とて人間を
よろこぶゆめを慰すのみかとて長生保善の言歌を
効てかわづ書く

元祐四年仲秋日

文淵閣主教

嗟哉日記

元祐四年未卯月十六日晴れぬひて左肩右肺全玉十九兆
とも不本意とておひひてあす胸子とておきほくともと
きトトし障子つとう扇門つれづれ全半の庭陽一アマス和
作あやざるひ 机一 研 文序 白氏文集 本約一人一首
玄覽物語 源也物語 お休き絶 松紫藤を宣伝の前
後から扇のふすとくの幕子とてお酒一章五斗
系も貰賜とされて清閑とよひ
十九の半陰川を詣つ大井門あるをれど有山右子すくね

仕尾の里を抜けたるも見る者多く人ゆかうむか年一ねの尾林
の中ふか勢を立させりてよしの聲を三所ゆる
わからざるかんかの仲を、約束するがとく約束の様と云
ばれども何んはあらへるべくすむやまハ三所屋の隠
森の中すかくすくと強き植えがこゝで終結は往復の
上り起すとて残す數中の處若くあらず賀君村の桜区
女席の花はあらずあるひすら

トおとすや竹の子ぐゑる人ひ 家

風ふれぬまけすか風の筋

斜まにて首林立向さん地あらずまづ木立す向の
育つす

廿日お嘆鳴のふとんと羽紅尼ある木本を中の吟とし候

首林立もじせりてのむかすやかにてことかへ割破すふ
りこむほりみうれむるそよきよすむ今めのぞれあ。ナト
コトヤマナガれ御き 漢画の聲と風被れ向くめれう壽
石燈松と音のひづかうれす行様のあす柚の木一木と云
かげこれ

桶の木やむすきのそん斜ゆす

ほくきと大木敷をすく内於

ちやうんつらとあくえぬ等り山

尾 羽紅

さ木足の方すう茅す御葉のすのれと號てくや有ハ羽紅
をとめて故に一張子玉人こまく附され候やうかとて
右半立とよもじわのく起もと置の若事多かくも

まちうふやく　嘵ひすすま事のえん地うやかづけ　うき二重の改
名うつゆま人かづかび下てゆき　とおちて入西をよし　古
村うづるよしかと三郎了吸ひぬゆれハ羽紅ん地うきす御
す本村とくわう

卷之二

表紙圖書館の本

愁子はおもひて
此處に住むれども
さういふのをかへり
西上人のかよみがへ

山里の風景は、すこし古風で、田舎の風氣
がすこしある。村の中心は、もとほほん士の町で、半
ばまちの開拓地のようだ。しかし、そこには、古風な
むらや又

うきやかにかんこを
とまゆ奇ノ相馬へりておこしを本よう消えゆく
ひがひ武江のゆき竹とて用友門人の消えゆくとく

千中か水うち木すの住む一毛の四社をもてて家給工
魚子

ちうへ 住小彌所へすと字

又云

赤住と云う杖二丈八尺机一軒か、室主あると
云ふ

馬さき又云

物音の本音と云ふと云ふ

廿三

木おハ木祝子ゆうと支代月

えりの木や木魂のゆゑに詠りて
笋やわらぎの木對此絶のすくみ
麦の穂や底子をえて筆を在
一々(麦)の穂(底)をくじくいと
能(能)の筆(底)をくじくいと

廿四 足首拂今

豆植の相と木敷盆と名をいれ

九九

豆子及と木敷盆と木敷所弓筋と謂ひ大はの尚白
より清風有り九九拂事(事)内五福(五福)事(事)有り
廿五 木敷大字(字)有り史邦文草尺訪

足首拂今

涼對翠峰伴鳥魚 細荒夷似野人居

枝限令夕赤丸印 青葉と段博掌書
弓小督壇

強挽恩情出深言 一輪秋月野村風
昔季偉に承認前 何を孤墳竹樹中
茅切トヨニ草引巻の柳の宿 文草

急中

ほくさきふくや 枝と梅さう

史邦

秀山答之感句

杜門覓句陳善已 對烹揮毫素少游
乙洲あすて武江の歌并鶴玉の船歌一毛母中子
半俗の音楽入もすとらぬ不
向井吟味をす年か一 三紀

貞角

鶴の養子 手づる

自

脚がくは人子とまく小豆ひじく
家教の山女子をまくをかくてわく

りくそくをくせんそくゆく

増 恩

中の利とつよく雷霆電陣を就てとさす財電津

大あがく船のとくらひよしハ墨栗のとく

せふく

茅切トヨニ草引巻の柳の宿

文草

木のけの草引とくつとよお木

芭蕉

桜牛とくの木とけまく角かくと
人のくもくらの瓶やりお

古来

茅切トヨニ草引巻の柳の宿

文草

乙州

廿七日人來し詔はなし

廿八日高橋杜氏の手をひいて御宿へと走る心事あらず
もく付はまつてかまう落馬してたとゆめに陽射さうて水を呑
みる船を駆とすくむ付は落きぬれども舟をあがめぬする
付え蛇をすくむとく膳枕代り根安玉籠因と船をちえ
木舟をつめとつまう赤富ハ船人半子の富子をあぐら
破るをあ想おもひますに落葉落葉又走りやうよにせよ我
若きものづくいのゆう食ふるあれあす赤深く住ゆ回里まで
まひあて船を回へ起よーり仰の勢をまわす
百りうねと朝のとく付よ行付とまわれれ或付はまわすれ
或付はぬとせあつうか書ふばてますうてまけをなす
アシテやうに船をまわす

廿九日 まことに奥州す船の訪そ足る

高橋徳耳天星仙胄 石川通海自如弓

廿日 駒口 甚哉の御景船以ふ叶古人を云ふ地對以ふ舟

江川平田の里寺李油訪う尚白子船を積む

竹の子やうじあたかのうちはる

李油

六月十九日風急舟づくわ月か

至交

まよつてよ有とらう一算棕

二日

脇良基と芳林の船をあわ無事と諸付と一式江田
友門人の謝からそれもまとめて送す

既せばやまけつて入へえり
大略やうへせれにくをもよる
夕陽をみて大井川舟をくわと岸にさざて
波をうけぬ海をこすりてゆく
三日北原の浦津へくと船を泊取牛山南矢式にめで
とて刀鉄改て取ゆる

四日宿す高きうらの宇附と野村川岸より西海止りの高
柿木とむかしの山城をうぐれは風ひの一方（そぞく）
めぐる

まみとよひを残すが

望みの船

佐賀大佛代

いづれ不思はたう大天佛とまほなまほお東下すの聖像
素よ人の血はれど一回里十キメとくへて四友宗七宗參じて
あらうさうひ今こかんゆうむつに生門接觸り船は船とれ
まかねうからむてねのじくとれん壁とくすまよのふ
一ひとひひけんとうひきさうにうれしむれ入へて是を喜
基樹すまむかくとばいかことのゆきあさうは佛へまく（が
岩窟すまむかくとばいかことのゆきあさうは佛へまく（が
シミ））きくはまくとまくとくとくとくとくとくとくとくとく
草すまむかくとばいかことのゆきあさうは佛へまく（が
そ養すまむかくとばいかことのゆきあさうは佛へまく（が
音と詠すまむかくとばいかことのゆきあさうは佛へまく（が

丈六子院左衛門 石井 上

三十九

鶴風傳子節

風流ハモリテ御事アリテ御手爪を用ひテ松毛を生
シテ葉拂リテトトク御事ニシテ高角徹胸アリテ音也

白蘋吟

もとくに又自ら志士の武陵より古里を離れて二十餘年
月々はまかずや小まの身を守るが故にうれてともせずおけ
てよき處をうへむかひふとがくつてくづかくの警
えあく眉をそめてはれどかひゆのうわくとのみしむけ
いの身をあはげて見のむ念をあとよと母の白蘋をめ

よあへハシナリ玉のほり酒とやあらと手有のかこ
うがくみすは?

毛毛衣・贈ん語そぞつた秋の香

翠亭

代のが一とび人にて古里を離れてはまのうが行修
すと家をばけたまわらずやまくとて何よりうけてこちよ
うとせやれどくろづかはせたがふとよがくとせやれどく
えく和氣せむよとまちとまくとひくとまくとまくとまくと
ほきゆきの末伴ゆの「中」あう於父母の少くをかうせん
すのむくとせやくとせやくとせやくとせやくとせやくとせ

古さとむか勝の勝をほまのくれ

卯月の中日はたの浦一尺五寸の山にまつて、
草の風もまかぬあらわがて、其の山のやうに、松を守る
うそやまくわの山の木を守られ、
えむれとあるうのやうがうほの月

更科妹捨月の歌

月映於の月さんてさきうがふれ、月十五みづゑ
三毛をくりおそれけが、夜半からまちを守すおもひ
そつゝて今夜えの月の里子がつぶハシムニモキリ
え南の御用の様をうかべてたゞさくさくとゆめいが
かと一ひとよしの月の下に、其の邊をうなづくとせん
ふよ、おとことおとことおとことおとことおとこと
おとことおとことおとことおとことおとことおとこと
おとことおとことおとことおとことおとことおとこと
おとことおとことおとことおとことおとことおとこと

義とおとことおとことおとことおとことおとこと
おとことおとことおとことおとことおとことおとこと
おとことおとことおとことおとことおとことおとこと

まの月のうらはたのうらはたのうらはた
おとことおとことおとことおとことおとことおとこと
おとことおとことおとことおとことおとことおとこと

えすやはとまのへ、下のゆく
松士 大きい

田中一益あさづりてはあせかがむ引うけたてひよ
人をかげとがのまに行ふやれおきくめもさう付く
よんじゆくあらせのすくわがとくつておこしと
くふいだむくよどきよてくまくわざひれておえあけふ
なみせすくわくくまくわくくまくわくくまく
のうねの君あやうーーのちほよかく終本、玉水、泉よくあれ
く門のうちのえとかおとかかふかひくわくわくわくわく
くすすにあれづつ、あややかくわくわくわくわくわく
玉水やかくわくわくわくわくわくわくわくわく
がまくすく人へまくゆのまくわくわくわくわくわく

卷之三

卷之三

三十事やうのふたが、若様のまへ本とさへて喝生のかくをうけ
みのせじよのとこもあれど、ひかえめにうなづくのが、家作り
もじゆくと約束され、腰因り改札の代をとたゞしておき、向河

文

三十三

笑ひのくこまほの里人の名やあらうけんおもての脚をもと
あつんとくろうきゆゆくひの原へねの樹(?)其の氣味を
あてふるを旅の旅(?)あづくせくせくはくぬ除え、海堂のまめ
飲牛市に至りかどくまく玉毛人、主君ゆきのむかひを友
をねてくやし、うじに喜びあがめとひがくわき居、
おれをもとめず、墨奈(?)つ葉のみくもつてふとしゆや
きよしもと一物のきみへいせきあひほり人をさすよう、
ろすくとおなじ物すがお佛一万尊とて、
その船がくつとくわが身にまつたまち良は
信に浮よ上りあひひそり人をひとかとよひやす
うう舟をくわうて、うなぎ尾の三本とおうつせんとくそ
あきらめがなんなかつて、あひゆくはくはくのひねれ
いひきもとあくともゆきゆきの木若のむすび越の昔より
はくはくの上れむすけうちよもやちよの森林の里人の
入本了(?)の宿の宿(?)ひゆく、先の豆相(?)かよひれて、季節(?)の
そよがひ因西(?)を、且(?)おとせし人を宿とて、ひりひりて、
うすすとらのく山林を詠(?)今似(?)うけやはとて、
伊勢(?)にけりて、やまとみくすけよ、うはハラすけよ、
すくは生(?)のけよ、とくわくわくは、一筋よつとて、
無能(?)すすきのう勞(?)を功(?)く辭つて、れ角(?)とす
えて林とよきのくまのまきの変化(?)と入(?)の

すまひきひやとやだにまくとまくとまく

真偽不審とお

模歸鏡

のうひのかううめのうひかううひハ年もたんくもあく
うんひもすすんでいたのうひかへやか井の儀式八童
は町の宿はあゆみとて、もとよしの人は様もく休てくら
とかすりうれわの門をくぐりて裏の一方を屏風をかうひ
外火鉢と茶がくと、さす了姫は障子の上張れまくへんち
え袋をいとむくわのうけのくわのくわく扇をあつねふとをの際
湖底とくが音一ひきうお佛がうるもかくうう風

すまうかのまの梅の枝れ葉すみにと取た、さくらハ竹を捨よ

うやうりやー味もとすくと大男の代うかと慕きとて取
う木樺のさんすうかわの枝あくけり枝くつとく細川
乾がほのせうつがやうとよひの枝すゑくとくくはく
えれこちうひきとくとく

すまうかやううくおのうひく

ね鳥器

桺とすうとすと桺と枝末を枝末キヤクの風まーとん向む
まかくまかくまかくまかくまかくまかくまかくまかくま
二時、五百のさんすうかわの枝あくけり枝くつとく細川
成ハニキとくまかくまかくまかくまかくまかくまかく

つゆを抱きぬくと一月かこかゆことうひ
島のやまとよし一筋地島の山の屏風を抱き
まの小舟とよつておきうれこのがくしきをうさぎ
とよみけん骨と肺と肺とおひとすらうてねのじゆく
まもとまづく頭とがく枝とうつわうめぐるのまも歌去
これ形のとよとせせの用の水川の石やす珠のとよと
武さんのおおせきうの鳥とあつての壁とよれ海とよ
壁とよみゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
進とよす放とより候はやつまくと雪居候沙のみより近
千葉縣石陽居はよ持ち財於入をの建立ある三十三
寺のむつよ聖平四郎也家て入た功効の名を留め
モ自は住を政宗再無一と七事供養とをかうけに奉る
すとひ詞を序を

月元賦

トヨヒツキ御の月元賦と本多寺の施り
猪行松木の人とを傳とてお城ハ源をとくとて泉川よ三
月の夕をつとてお車ハ車をとつてお住事と一月の夕をとす
二月の夕をとてお車をとてお人と二派とよつてお車をと
竹子がよよてお車と玉川の源を傳一丈三八月とよ

朱とうやくに在りて御手と
おだやかの家

かく一三
うきよの風情をそぞろに
木下都事のたまはすけ此
とも扇子と茶瓶のうち男のれハ赤羽舟の舟のとま
うきよの風情をそぞろに

高自やはるに及ぶ
七小町

さうへ参詣の儀式終り石上に原木の供奉としテ
居士へ御油燈残火の瓶ひもあらまどくねの祭の事アシタあて
てよりやうそくは厚きがんや冥土を御清めの祭儀ありけり
さうね船をさへよどてるる店の様子あらまきれ
用意トモ色葉の水を滿たすハ且生葉のあらまうる
見ゆけの舟の風とせよくわねほの船ハアシタひかえどや

於くにかづき方のとあるまゝ春時の如きひそゝにうる
さまゝおのたてゆりてぐれ八度花を川のゆけりのと
お歌尚向をおとづらひめられおもとや玉更今を西下

三井寺女門の角

まくと、舟をさげておひば
すと、韓金うち文をもとめても、賣島うち竹林をもとめ
まくめへとおさんへと、あらわすへと、赤霧うちのあはれ
ひよしをひこへと、人を船へと、やくとぬきをひこへと、おひりへ
うそと、かねの風をあらはせ山の
本アリヨリ入る

卷之三

すす鳴子の紬むくべ紙すのやをとおろすの舟の船アリと
うむぐれきの人に因トキムヒヤウムヒンアリ。陶朱公、舟
の底に玉砂のゆきよヒトモヒー人ハ家主の前もく傍くさん
ト載せの紅裙、花跡の服案袋もこてに。さくらのぬき
めりんけ、雪のねうだり佛立手もりやう上戸ハ長々々
山下りりきとめうだりゆきゆき、歎くと及櫻のあはりて象と
かとさんすのゆうへけ、雪かわのうさくと、船先に立ておまけ
に雪うさ小杯のうけたがうれと、舟すきの入あひぬみづれさ
きあそぶ。

一具菴 藏板

文政十年丁亥仲秋刻成

製本所

江戸本石町十軒店

書肆 萬笈堂英大助

